

海老沢達郎の教養講座

第5回 映画で楽しむ異文化理解 ― 映画音楽について (2021年8月15日)

今回は映画音楽についてお話ししたいと思います。ここで言う映画音楽とは、主題歌、テーマ音楽、映画で歌われた音楽等の映画で使用された全ての音楽を含むことに致します。皆さんにとって、記憶に残る映画と映画音楽は何でしょうか。例えば、キャロル・リード (Carol Reed) 監督、グレアム・グリーン (Graham Greene) 脚本、オーソン・ウェルズ (Orson Welles) 主演、アントン・カラス (Anton Karas) によるテーマ曲のチター演奏 (スイス、オーストリア等の民族弦楽器) の映画と言えば、第二次世界大戦直後の米英仏ソの4カ国によって分割統治され、廃墟となったウィーンを舞台にした、1949年英国映画の『第三の男』 (*The Third Man*) ですね。皆さんの中で、映画にも登場した、あの大観覧車に乗った方もいるのではないのでしょうか。日本では、エビスビール (サッポロビール) のコマーシャルがきっかけで、『第三の男』のテーマ曲がJR 山手線の恵比寿駅の発車メロディーになっています。今の恵比寿ガーデンプレイスに、サッポロビールの恵比寿工場があった理由からだと思います。そういえば、大学生の時にサッポロビールの恵比寿工場に見学に行き、最後にエビスビールを頂いた思い出があります。



次頁の表はAFI (American Film Institute) の映画主題歌ベスト100 (The 100 Greatest American Movie Music) のベスト10です。『ティファニーで朝食を』では、オードリー・ヘプバーンが歌う「ムーン・リバー」がすぐ浮かびますね。『卒業』ではサイモン&ガーファングルの音楽が効果的に使用され、「ミセス・ロビンソン」は映画の登場人物でもありますので、印象深い音楽です。『カサブランカ』では、“Play it, Sam. Play As Time Goes By.” (サム、あれを弾いて、「時の過ぎゆくままに」を) がAFIの名セリフベスト100 (2005年) の28位にランクされており、歌もAFIの映画主題歌ベスト100 (2004年) で

は下記の表のように第2位に。そして、AFIのアメリカ映画ベスト100（2007年）では、映画も第3位にラランされています。また、AFIの映画スターベスト100（1999年）では主演のハンフリー・ボガート（Humphrey Bogart）が男性第1位に、イングリッド・バーグマン（Ingrid Bergman）が女性第4位に選ばれております。映画『カサブランカ』はアメリカ国立フィルム登録簿（National Film Registry）に最初に選ばれた25作品の一つで、アメリカで最も人気があり、評価の高い映画であると言えるでしょう。

AFI's 100 years... 100 songs
The 100 Greatest American Movie Music

順位	主題歌	映画名	歌手	公開
1	<i>Over the Rainbow</i> 虹の彼方に	<i>The Wizard of Oz</i> オズの魔法使い	Judy Garland	1939
2	<i>As Time Goes By</i> 時の過ぎゆくままに	<i>Casablanca</i> カサブランカ	Dooley Wilson	1942
3	<i>Singin' in the Rain</i> 雨に唄えば	<i>Singin' in the Rain</i> 雨に唄えば	Gene Kelly	1952
4	<i>Moon River</i> ムーン・リバー	<i>Breakfast at Tiffany's</i> ティファニーで朝食を	Audrey Hepburn	1961
5	<i>White Christmas</i> ホワイト・クリスマス	<i>Holiday Inn</i> スイング・ホテル	Bing Crosby	1942
6	<i>Mrs. Robinson</i> ミセス・ロビンソン	<i>The Graduate</i> 卒業	Paul Simon & Art Garfunkel	1967
7	<i>When You Wish Upon a Star</i> 星に願いを	<i>Pinocchio</i> ピノキオ	Cliff Edwards	1940
8	<i>The Way We Were</i> 追憶	<i>The Way We Were</i> 追憶	Barbra Streisand	1973
9	<i>Stayin' Alive</i> ステイン・アライヴ	<i>Saturday Night Fever</i> サタデー・ナイト・フィーバー	The Bee Gees	1977
10	<i>The Sound of Music</i> サウンド・オブ・ミュージック	<i>The Sound of Music</i> サウンド・オブ・ミュージック	Julie Andrews	1965

AFI's 100 years... 100 songs を参考にして作成

それでは、今回はアメリカで最も人気の高い映画『カサブランカ』と「音楽」についてお話し致します。『カサブランカ』は第16回アカデミー賞で、作品賞、監督賞、脚色賞を受賞しております。映画公開当時（1942年）、フランスはパリを中心とする北部はドイツ軍に占領されておりました。ドイツに協力的な親独政権であったヴィシー政権（1940年--1944年）がフランス中央部に位置しているヴィシー（Vichy）に首都を置いていました。その関係からヴィシー政権と呼ばれております。ヴィシーはミネラルウォーターの Vichy water（ヴィシー水）でも有名です。

最初に、『カサブランカ』の粗筋を紹介いたします。カサブランカ（モロッコ）はヴィシー政権の管轄下にあります。ヨーロッパ各地から、カサブランカへ逃れてきた人たちの中には、自由を求めてリスボン経由で、アメリカに行くことを希望する人たちがたくさんおりました。カサブランカでナイト・クラブ兼賭博場を営んでいるアメリカ人のリック（ハンフリー・ボガート）の店に、ドイツ軍がパリを占領（1940年6月14日）する前に、パリで恋人だったイルザ（イングリッド・バーグマン）が、チェコの対独抵抗運動の指導者で夫のヴィクター・ラズロ（ポール・ヘンリード）と共に訪れます。ラズロは出国ビザを扱っている闇屋のウーゲーテからドイツ軍発行の通行証を購入するために訪れたわけです。この通行証の所持者は中立国のポルトガルへの出国にあたり優先的に飛行機に搭乗できます。ラズロはリスボン経由でアメリカへの脱出を図っていたのです。イルザは、ピアニストのサムに、“*As Time Goes By*” をリクエストします。リックはパリの思い出であるこの曲の演奏を店では禁止しておりました。思いがけない再会にリックは胸を痛めます。リックはウーゲーテからドイツ軍発行の通行証を一時預かりますが、その後、ウーゲーテはドイツ人殺害容疑で警察に逮捕され、殺されます。イルザは闇市のボスのフェラーリから、通行証はリックが持っていることを知らされ、深夜にリックの店を訪れます。イルザはパリでリックのもとを去った理由を話し、やがて二人は愛情を確認いたします。しかし、リックは二人のために、闇屋のウーゲーテから預かった通行証を与えることと、二人を助けることを決意いたします。リックは空港に駆け付けたドイツ軍のシュトラッサー少佐を射殺し、ラズロとイルザは飛行機でリスボンに向け、カサブランカを脱出します。空港で、ルノー警察署長はヴィシー水と書かれたミネラルウォーターの瓶をゴミ箱に投げ捨て、そのゴミ箱を蹴とばすことで、実は対独抵抗運動の支持者であったことを明かします。リックはルノー署長に、「ルイ、これが美しい友情の始まりだな ”*Louis, I think this is the beginning of a beautiful friendship*”」（このセリフは、AFIの名セリフ100の

20位にランクされております)と言って、二人は空港から闇の中へ去って行き、映画は終わります。

『カサブランカ』の主題歌は「時の過ぎゆくままに」で、映画でも何度も演奏されておりますが、この映画で最も印象的な歌は、私は「時の過ぎゆくままに」ではなく、「フランス国歌」だと思っています。それは、アメリカ人のリックが経営するナイト・クラブにいた人たちがフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」を歌う場面です。その場面とは、リックの経営する「カフェ・アメリカン」で、ドイツ軍のシュトラッサー少佐とドイツ軍人たちがドイツの愛国歌を大声で合唱しています。丁度その時、対独抵抗運動の指導者のヴィクター・ラズロがリックにカサブランカ脱出の協力を頼む為に彼の店を訪れていました。ラズロは2階のリックの事務室から降りて行き、「ラインの護り」に対抗して、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」を演奏するよう、店のバンドに指示します。リックもこれを認め、店にいた人たちが一斉に「ラ・マルセイエーズ」を歌い始めます。やがて、ドイツ軍人たちは圧倒され、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」が店中に響きわたるシーンです。この映画を見た人は誰でも感動するシーンだと思います。

ドイツ軍人たちが歌っていた歌は国歌ではなく、ナチスを賛美する歌でもなく、「ラインの護り」(*Die Wacht am Rhein*)という愛国歌です。歌詞は1840年に作られ、作曲は1845年。1870年普仏(ふふつ)戦争(正確には、フランスとプロイセンの戦いで、この後にドイツが統一する)が勃発すると、ドイツ兵たちは「ラインの護り」を歌い、フランス内に進撃して行きました。ドイツが圧倒的に勝利すると、この愛国歌はドイツ全土で愛唱されるようになりました。反戦映画で有名な『西部戦線異状なし』(*All Quiet on the Western Front*) (1930年)でも映画冒頭で、学生たちが教室でこの歌を歌いながら戦場に行くシーンがありました。この愛国歌は、『カサブランカ』でも歌われているように、第二次世界大戦までドイツ兵たちによって愛された歌のようです。参考までに、「ラインの護り」の歌詞の一部を紹介致します。

雄叫びが轟く、雷鳴のように
剣の激突、怒涛のように
「ライン、ライン、ドイツのラインへ！
だれがラインを護るのか？」
愛する祖国よ、心安らかでいるがよい

ラインの護りは堅く忠実だ！

加藤雅彦（1999）「ライン河—ヨーロッパ史の動脈—」岩波書店、pp.65-66 より引用

フランス国歌だけでは十分に感動を与えることは難しかったと思います。「ラインの護り」というドイツの愛国歌とフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」をうまく対比させるために、この映画のシーンに二つの歌が挿入されたのだと思います。だからこそ、このシーンで、ドイツ軍人たちが歌う「ラインの護り」を圧倒するフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」が感動を与えたのではないのでしょうか。些細なことではありますが、「ラインの護り」というドイツの愛国歌の歴史を知っていることも、この場면을十分に理解する上で重要なことの一つであると思います。やはり、映画はその背景を知ること、より楽しく鑑賞できることになります。「たかが映画、されど映画」ですね。また、この映画は戦争中に製作、公開されておりますので、「アメリカは素晴らしい国だ」というプロパガンダ（宣伝）的要素を持った映画でもあると思います。こういうところも理解すれば、より映画を楽しめると思います。

最後に、第5回目の「教養講座」の原稿をオリンピック期間中に書いております。従って、日本を初めとし、各国の国歌の演奏を何度も聞きました。印象的だったのは、「柔道混合団体」の決勝で、日本とフランスが対戦した時のことです。私は日本が完勝するものと思っておりましたが、逆に日本は1-4で完敗し、銀メダルとなりました。日本は柔道発祥の地であり、講道館は柔道家にとっては聖地であり、日本武道館で試合をすることは選手にとっては憧れであるということを見ると、映画『カサブランカ』と同じように、フランスチームは表彰台で金メダルをかけ、フランス国歌の演奏（今回のオリンピックはコロナのために声を出して歌えず）に感動したのではないのでしょうか。「国歌」の持つ意義を感じた、この夏でした。